



龍潛寺一茶翁著并圖

我曹集

信陽弓明菴藏梓

世々の變風、
元祿に至りて
正雅やゝ定ま
りしよりこの
かた、諸家の
風調、おのお
のその得失に
よりて、風姿
極りなしとい
へども、かの
向上の一路は
踏たがふ事な
く、ひばりの
くちさかしく、
蚯蚓の鈍くお
かしげなる、

世々變風元祿に至りて
正雅やゝ定まりしより
このかた諸家の風調
おのおのその得失に
よりて風姿極りなし
といへどもかの向上
の一路は踏たがふ事
なくひばりのくちさ
かしく蚯蚓の鈍くお
かしげなる

かはあれど毛
頭れいの向上
の本意を失は
ず、實に近世
獨歩の俳道人
とせむ歟。こ
たび同國の一
之、家に傳へ
し坊が遺稿を、
その儘上木し
て追慕のこゝ
ろざしを盡す。
予も亦舊知己
をわすれず、
坊が命終の年、
柏原の舊里を

日よか一之家へて坊へ
行かまの候上木をり近き
少く候へり。予も亦旧知
故より此坊へ命終の年
柏原の舊里へ訪ひて終る
う。予も亦旧知己をわす
れず、坊が命終の年、
柏原の舊里へ

訪ひて往事を
かたるに、あ
るひは泣、あ
るひはわらひ
てわかれぬ。
其儘まぼろし
に見へて、扱
こそこの集の
序者にたてる
も、これ又因
縁によれるべ
らし。

嘉永壬子
春涅槃日
東都
瓢隱居逸淵

序者、かたはるは名もなし
因縁、さきよりあるはなし

嘉永壬子春涅槃日

東都 瓢隱居逸淵



昔たんこの國普甲寺といふ所に、深く淨土をねがふ上人ありけり。としの始は世間祝ひどしてさゞめけば、我もせん連、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしかゞせよと、きといひをしへて本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅ミ／＼は小間キに、初鳥の聲とおなじくがばと起て、教へのどく表門ンを丁／＼と敲けば、内より、いづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧にいと答ふるよりはやく、上人裸足にておどり出て、門の扉を左右へさつと開て、小法師を上坐に稱(請)じて、きのふの手紙をとりてうや／＼しくいただきて讀ていはく、其世界は衆苦充滿に仲間、はやく吾國に來たるべし、聖衆出むかひしてまち入り。とよみ終りて、お／＼と泣れけるとかや。此上入みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきつゝ、初春の淨衣を絞りて、したゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人に對して無常を演るを禮とすると聞かからに、佛門においてはいはひの骨張るべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも厄拂ひの口上めきて、そら／＼しく思ふからに、か

ら風の吹けばとぶ屑家は、くづ屋のあるべきやうに、門松立てす煤はかず、雪の山路の曲り形りに、としの春もあなた任せになんむかへける。

目出度さもちう位もおらが春 一茶

こぞの五月生れたる娘に、一

人前の雞煮膳を居へて

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

とし男つとむべき僕といふもの
もあらざれば

名代にわか水浴る鳥かな 一茶

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月
山の月花盜人をてらし給ふ

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな
さくら／＼と唄はれし老木哉

櫻へと見えてじん／＼端折哉

(頭書)ツボサウゾクハウハギハ上衣ノツマヲハ
サミタル姿也。今云カイドヲハシヲリノサマ也。
玉カツラニツボヲリ姿ト云ミ。

初 午

花の世を無官の狐鳴にけり
かくれ家や猫にもすへる二日亥
葎からあんな胡蝶の生れけり

上野遠望

白壁の誹れながらかすみけり
苗代は菫のかさりに青みけり
花の陰あかの他人はなかりけり

二月十五日

小うるさい花が咲迎寝釋迦かな
み佛や寝ておはしても花と錢
猫の子や秤にかゝりつゝじやれる

玉 川

さらし布霞の足しに登へけり

妙專寺のあこ法師たか丸迎、とし十一に成りけるが、三月

七日の天うら／＼とかすめるにめで／＼はんりうといふ、
ふとくたくまじき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまか
りて、芹薺などつみて遊ぶ折から、飯綱おろしの雪解水、
黒けぶり立て、動／＼と鳴りわたりておし來たりしに、い
かゞしたりけん橋をふみはづしてだぶりと落たり。やあれ
觀了たのむ／＼と呼はりて、爰に頭いづると見れば、かし
こに手を出しつゝ、たちまち其聲も蚊のなくやうに遠ざか
ると見るを此世の名残として、いたましいかな、逆巻く波
にまき込まれて、かげも容も見へざりけり。あはやと村の
人／＼打群りて、炬をかがけてあちこち捜しけるに、一里
ばかり川下の岩にはさまりてありけるをとり上げて、さま
／＼介抱しけるに、むなしき袂より蕨の莖三つ四つこぼれ
出たるを見る(見るにカ)つけても、いつものどくいそ／＼
歸りて、家内へのみやげのれうにとりしものならんと思ひ
やられて、鬼をひしぐ山人も皆／＼袖をぞ絞りける。とみに
駕にのせて、初夜過るころ寺にかき入れぬ。ちゝ母は今や
おそしとかけ寄りて、一目見るよりよ／＼と人目も耻ず
大聲に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も、其
身に成りては、さすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけ

ぬ(ぬるカ)はとほり也けり。且には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍と成りてもどる。目もあてらぬ(られぬカ)ありさまにぞありける。しかるに九日野送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下蒔いそぐわか草を

野邊のけぶりになして見んとは 一茶

長く()の月日、雪の下にしひたる蔭蒲公のたぐひ、やをら春吹風の時を得て、雪間()をうれしげに首さしのべて、此世の明り見るやいなや、ぼつりとつみ切らるゝ草の身になりなば、魔丸法師の親のどくかなしまざらめや。草木國土悉皆成佛とかや。かれらも佛生得たるものになん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙哉 一茶

梅の花爰を盗めとさす月か 、

松嶋の小隅は暮て鳴く雲雀 、

大猫の尻尾でなぶる小蝶哉 、

三月十七日ほしな詣

花ちるやとある木陰も小開帳 、

通りぬけせよと垣から柳かな 、

餅腹をこなしがてらのつき穂哉

正月元日の夜の丑刻より始りて、打つゞき八日目()に天に音楽あるといふ事、誰いふともなく云觸らして、いつ()の夜、そんぜうそこにてしかときゝしと(いふ説カ)人も有又吹風の迹なし事とけなすものもあり、其噂東西南北にばつと弘りぬ。つら()思ふに全く有りと信じがたく、又ひたすらなしとかたづけがたし。天地ふしぎのなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞しためしなきにしもあらず。今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優してたのしむならめ。それを聞得ざるは、其身の罪の程によるべし。何にまれ、あしからぬとりさたなりと、三月十九日夕過より誰かれ我菴につどひつゝ、おの()息をこらして、今や()と待うち、夜はしら()明て、窓の梅の木に一聲有。

今の世も鳥はほけ経鳴にけり 一茶

鶯の馳走に掃しかきね哉 、

馬迄もはたご泊や春の雨 、

雀の子そこのけ()御馬が通る 、





かすむ日やしんかんとして大坐敷
横乗の馬のつゞくや夕雲雀

京崎原

入口のあいそになびく柳かな

藪村やまぐれあたりも梅の花

正月や夜はよる迎うめの月

茶屋むらの一夜にわきし櫻かな

翌くゝと待たるゝうちが櫻かな

なぐさみにわらを打也夏の月

卯月八日

長の日をかはく間もなし誕生佛

五月雨も中休みかよ今日は

病後

ちりの身とともにふはく紙帳哉

五月雨も仕廻のはらりくかな

小坐頭の天窓にかぶる扇かな

竹の子と品よく遊べ雀の子

一茶

白飛

一茶

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ

谷麻橋

這わたる橋の下よりほとゝぎす
はつ瓜を引とらまへて寝た子哉

人形町

人形に茶をはこばせて門涼み
今迄は罰もあたらず蜚塵蚊屋
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ
世がよくばも一つ泊れ飯の蠅
卵の花に一人きりの社かな

幽栖

虫に迄尺とられけり此はしら

身一つぐす逆、山家のやもめ
の哀さは

おの(が)里仕廻でどこへ田植笠
あつばれの大わか竹ぞ見ぬうちに
花つむや扇をちよいとぼんのくぼ
としよりと見るや鳴蚊の耳のそば

戸隠山

一茶

居風呂へ流し込んだる清水かな
此入りはどなたの菴ぞ苔清水
一つ蚊のだまつてしくりゝかな
其門に天窓用心ころもがえ
かくれ家の柱で麥を打れけり

越後女旅かけて商ひする哀さ

麥秋や子を負ながらいはし賣
笋よ人の子なくば花咲ん
芝でした休み所や夏木立
山苔も花さく世話はもちにけり
子子の天上したり三ヶの月

獨樂坊

寢所見る程は卯花明りかな
法の山や蛇もうき世を捨衣

としみちのくの方修行せんと、乞食袋首(にカ)かけて小風
呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行らしく見え
て殊勝なるに、心は雪と墨染の袖(頭書)似雲法師 西行に姿

ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖」と、思へばく入梅晴
のそらはづかしきに 今更すがた替へるもむづかしく、卯花
月十六日といふ日、久しく寐馴れたる菴をうしろになして
二三里も歩みしころ、細杖をつくゝ思ふに、おのれすで
に六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、
又ながらへて歸らんとも白川の關をはるゝ越る身なれ
ば、(頭書)天哉子ノ迷ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌなが
らへて歸らんとも白川の關をはるゝ越る身なれば 一巻」十
府の菅菰の十に一つもおぼつかなしと案じつゞくる程に、
ほとんど心細くて、家ゝの鶏の時を告る聲も、とつてか
へせよとよぶやうに聞へ、畠ゝの麥に風のそよ吹くも、
誰ぞまねくどく覺へて、行道もしきりにすゝまざれば、と
ある木陰に休らひて瘦腰さすりつゝ詠るに、柏原はあの山
の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何とな
く名残りおしさに、

思ふまじ見まじとすれど我家哉 一茶

おなじ心を

古郷に花もあらねどふむ足の
迹へ心を引くかすみかな 全

春がらお



あまひらをおどろかさじと青麥に

ほどよき風の吹すぐるかな

日、懈怠、不、惜、寸陰、

(讀書) 朱文公勸學文 勿謂

今日不學而有來日。勿謂

今年不學而有來年。日月逝

矣。歲不我延。嗚呼老。是

誰之愆。

けふの日も棒ふり虫よ翌も又

無限欲有限命

此風に不_レ足いふ也 夏坐敷

起_レの欲目引張る青田哉

心に思ふとを

古郷は蠅迄人をさしにけり

直き世や小錢程でも蓮の花

松陰や寢蓐一ツの夏坐敷

題 兼明

三度搦て蜻蛉とまるや夏座敷

片息に成て進入る螢かな

夕貌の花で涕て(て行力)かむおば、哉

全

一 茶

、 、

、 、

、 、

、 、

、 、

、 、

希 杖

一 茶

一 茶

あつい逆つらで手習した子哉
大螢ゆらり_レと通りける

田中川原如意湯に晝浴みして

なを暑し今來た山を寢て見れば

なむあみだ佛の方より鳴蚊哉

とべよ蚤同じ事なら蓮の上

かくれ家は蠅も小勢でくらしけり

ひいき鷄は又もから身で浮みけり

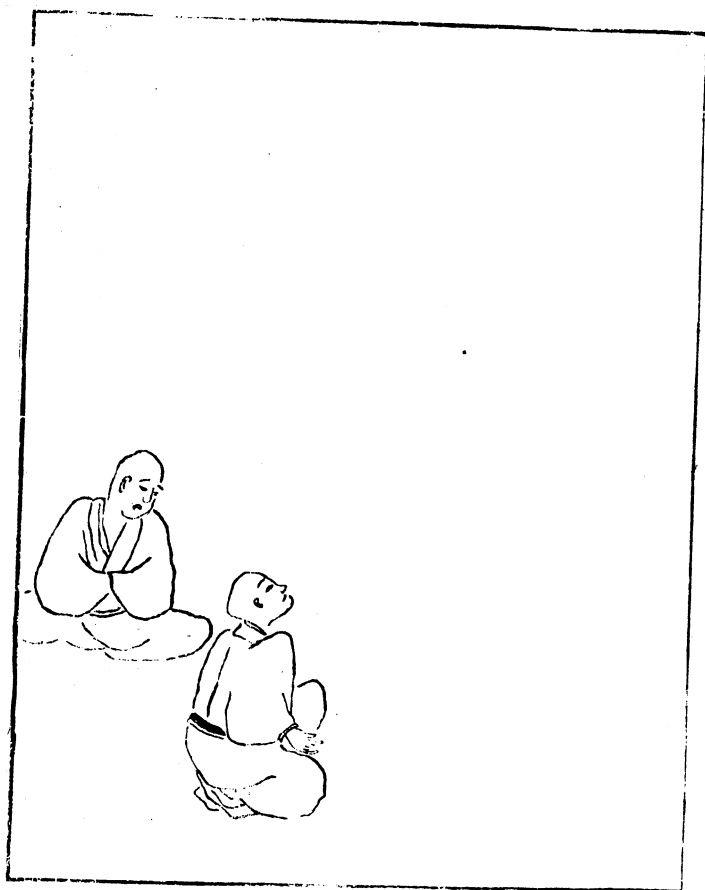
松の蟬どこ迄鳴て晝になる

今迄は雷もあたらず晝寢蚊屋

(此句重出也)

はなれ鷄が子のなく卅にもどりけり

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲き
たり逆、いひつきき_レ傳へて界隈はさら也、よそ國の人も
足を勞して、わざ_レ見に來るもの日_レおほかりき。お
のれもけふ通がけに立より侍りけるに、五間ばかりに花園
をしつらひ、雨覆ひの都など今様めかしてり_{レ</}



へいはれあるにや。

卯の花もほろり／＼や藝の塚 一茶

此もの諸越の仙人に飛行自在の術をしへ、我朝天王寺には大たゝかひに、ゆゑしき武名を殘しき。それは昔／＼のゑにして、今此治れる御代に隨ひ、ともに和らぎつゝ、夏の夕暮せどに薙を廣げて、福よ／＼と呼ばば、やがて隅の藪よりのさ／＼這ひよりて人と同じく涼む。其つら魂ひ一句いひたげにぞありける。さる物から長嘯子の虫合に歌の判者にあらまれしは、汝が生涯のはまれなるべし。

ゆうぜんとして山を見る 蛙哉 一茶

鶯にまかり出たよ引 蟻 其角

思ふとだまつて居るか 蟻 曲翠

一茶。天窓なでけり引がへる 一茶

(頭書) 雷

そんじよそ爰と青田のひいき哉
闇の蚊のふんとばかりに焼れけり
鶉の眞似は鶉より上手な子ども哉
寝並んで遠夕立の評義哉
留主中も釣り放しなる紙帳かな

蛙の野姿

紅む紫、はなのさま透間もなく開き揃ひたり。其中に黒と黄なるはいひしに違はず、目をおどろかす程めづらしく妙なるが、心をしづめてふたゝび花のありさまを思ふに、ばさ／＼として何となく見すばらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りのたをやめの側に、むなしき屍を粧ひ立て並べおきたるやうにて、さら／＼色つやなし。是主人のわざくれに、紙もて作りて葉がくれにく／＼りつけて、人を化すにぞありける。されど腰かけ臺の價をむさぼるためにもあらで、たと日／＼の群衆に酒茶つひやしてたのしむ主の心、おもひやられてしきりにをかしくなん。

紙屑もばたん貌ぞよ葉がくれに 一茶

爰らの子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて諷ふていはく、ひきどのゝお死なつた、おんばくもつてとぶらひに／＼と口／＼にはやして、茶炊の葉を彼うづめたる上に打かぶせて歸りぬ。しかるに本草綱目、車前艸の異名を蝦蟇衣といふ。此國の俗、がいろつ葉とよぶ。おのづからに和漢心をおなじくすといふべし。むかしはかばかりのされどさ





爲レ暴。(頭書)孟子。」

關守りの灸点はやる梅の花

人聲に子を引かくす女鹿かな

はつ螢其手はくはぬとびぶりや

蓮の花少曲るもうき世哉

隈界(界隈カ)のなまけ所や木下閣

大沼

萍の花からのらんあの雲へ

越後

柿崎やしぶく鳴の閑古鳥

江戸住居

青草も踐だけそよく門涼

なでしこに二文が水を浴せけり

小金原

母馬が番して吞す清水哉

風あるをもつて尊ふとし雲の峰

疫病神蚤も負せて流しけり

茂林寺

蝶くのふはりととんだ茶釜哉

一茶

櫻迄悪く云はする藪蚊哉
蟻の道雲の峰よりつゞきけん

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて栗三つ拾ひ來りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つやくと芽を出して、しげなりけるを、東隣にて家に家を造り足しぬるからに、月日の恵みとどかず、雨露の潤ひうとければ、其としやを一尺ばかり伸びけり。しかるを此國のならひ、冬に成れば、東より西より、南より北より、家の大雪をひたおとしに落し込むからに、恰も越のしら山、一夜に兀と涌出たるにひとしく、其山に薪水をはこぶ道を作るに、愛宕山の石壇に登るがどし。漸二三月ごろおしなべて長閑なるに、隣くの脊戸島は草木青みわたりて花もまれく咲けるに、彼山はいまだ眞白妙に風牙へて嚴寒を欺くけしきに、やゝ卯月八日、髪さけ虫の歌を則に張るころ、山鶯の折しり貌に鳴けば、雪の消へ口より見るに哀なるかな、栗の木末は根際よりぼきりと折て仕廻ぬ。人ならば直に無常のけふりと立昇るべきを古根よりそろく青葉吹て、かううじて一尺ばかり伸けるを、又前のどく家の雪を落し込れてぼきりと

折れ、年く折れく、て、とし七年の星霜を累ねれど、花
咲き實入るちからなく、されど此世の縁盡されば枯も果す
して、生涯一尺程にて生て居るといふばかりなるべし。我
又さの通り、梅の魁に生れながら、茨の遅生へに地をせば
められつゝ、鬼ばゝ山の山おろしに吹折れく、て、晴れく
しき世界に芽を出す日は一日もなく、とし五十七年、露の
玉の緒の今迄切さるもふしぎ也。しかるに、おのれが不運
を科なき草木に及すとの不便也けり。

なでしこやまゝはゝ木ゝの日陰花 一茶
さるべき因縁ならんと思へば、くるしみも平生とは成り
ぬ。

朝夕に覆かぶさりし目の上の
辛夷も花の盛り也けり 一茶

、其引

子ばかりの蒲團に蘆の穂綿哉
竹の雪はらふは風のまゝ子哉
うつくしきまゝ子の貌の蠅打ん
なげゝ逆敷さへ寝させぬまゝ子哉
貞孝四丁卯歌仙
葛の縄目をゆるされし文

山崎 宗鑑
正勝
紅雪
未達

まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて
芭蕉

色園拾遺

下部ひそかに首埋めける

おく五歌仙

繼母の又口ばしる夜の雨

未達

山木かくれて草に血をぬる

芭蕉

わづかなる世をまゝ母に偽られ

風流

小さき土鍋のありけるを我腹の子にとらせて、とらせざり
ければ、鶯の鳴をきゝてよめるとなん。

鶯よなどさはなきそちやほしき

小鍋やほしき母や戀しき 貫之娘

親のない子はどこでも知れる、爪を唾へて門に立。と子ど
もらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、う
らの畠に木萱など積たる片陰に踞りて長の日をくらしぬ。
我身ながらも哀也けり。

我と來て遊べや親のない雀 彌太郎

六才

昔大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日
程ほしてより、飯を一碗見せびらかしていふやう、是をあ
の石地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、ま
ま子はひだるさたへがたく、石佛の袖にすがりてしかん、
ねがひけるに、ふしぎやな石佛、大口明てむしゝ喰ひ給

ふにさすがのまゝ母の角もぼつきり折て、それより我うめ
る子とへだてなくはごくみけるとなん。其地藏ぼさち今に
ありて、折くの供物たへざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風 一茶

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる
娘、おろかにして、ものにさとかれ迎名をさとよぶ。王
し誕生日祝ふころぼひより、てうちあは天窓てん
く、かぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふ
ものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれは、とみに
とらせけるを、やがてむしやしやぶつて捨て、露程の
執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を
打破りつゝ、それもたゞちに倦て、障子のうす紙をめり
むしるに、よくしたとほむれば誠と思ひ、きやら
と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もな
く、名月のきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るや
うになく心の皺を伸しぬ。又人の來りてわんはど
こにといへば大に指し、かあはと問へば鳥にゆびさす
さま、口もとより爪先迄愛敬(嬌か)こぼれてあひらしく、

いは春の初草に胡蝶の戯るよりもやさしくなん覺へ侍
る。此おさな、佛の守りし給ひけん、追夜の夕暮に持佛堂
に蠟燭てらして鎗打なせば、どこに居てもいそがはしく
這よりて、さわらびのちいさき手を合せて、なんむと
唱ふ聲、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それ
につけてもおのれかしらにはいくらの霜をいたゞき、額に
はしは波の寄せ来る齡にて、彌陀たのむすべもしらで、
うか月日を費やすこそ、二つ子の手前もはづかしけれ
と思ふも、其坐を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむら
がる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、刺、佛のいま
しめし酒を吞む。折ヒヨリから門に月ムツケツさしていと涼しく、外にわ
らはへの踊の聲のすれば、たゞちに小椀投捨て片いざり
いざり出て、聲を上げ手眞似して、うれしげなるを見るに
つけつゝ、いつしかかれをもふり分髪ハナミのたけになして、お
どらせて見たらんには、廿五井の管絃よりもはるかまさり
て興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさを
なんはらしける。かく日すがらをじかの角のつかの間も、
手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から、
朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯

焚そこら掃かたづけて、團扇ひら／＼汗をさまして、間に泣聲のするを目の覺る相圖とさだめ、手かしこく抱き起してうらの畠に尿やりて、乳房あてがえは、すは／＼吸ひながら、むな板のあたりを打た／＼きて、にこ／＼笑ひ顔を作るに、母は長／＼胎内のくるしびも、日／＼襦袢の穢らしきもほと／＼忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、なですりて一入よろこぶありさまなりけらし。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

一茶

より／＼思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ。

柳からも／＼ぐあ／＼あ／＼と出る子哉

蓬萊になんむ／＼といふ子哉

年間へば片手出す子や更衣

小兒の行末を觀して

たのもしやてんつるてんの初給
名月を取てくれるとなく子哉
子寶がきやら／＼笑ふ椿火哉
あこが餅／＼とて並べけり
妹が子の背負ふた形りや配餅
餅花の木陰にてうちあは／＼哉

涼風の吹く木へ縛る我子哉
わんぱくや縛られながらよぶ螢

其引

あゝ立たひとり立たるとし哉
子にあくと申人には花もなし
袴着や子の草履とる親心
花といへも一ついへやちいさい子
春雨や椿子より出す童の手
早乙女や子のなく方へ植て行
折とても花の木の間のせがれ哉

はしとり初たる日

鵲鳴や赤子の頬をすふ時に

全

貞徳 芭蕉 子堂 羅香 東來 葉捨 其角

男にきらはれて親のもとに住みけるに、おのが子の初節句見たくも、晝は人目茂げ／＼れば、

去られたる門を夜見る轍かな

よみ女
しらサ

子を思ふ實情さも聞へて哀也。猶(猛カ)きものゝふの心を和らぐるとは、かゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも風の便りにもき／＼なば、いかでかふた／＼呼び

歸さざらめや。

所有畜類是世々親族すとなん、親をしたひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

人の親の鳥追けり雀の子 鬼貫

夏山や子にあらはれて鹿の鳴 五明

負て出て子にも鳴かする蛙哉 東陽

鹿の親笹吹く風にもどりけり 一茶

小夜しぐれなくは子のない鹿に哉

子をかくす藪の廻りや鳴雲雀

樂しみ極りて愁ひ起るは、うき世のならひなれど、いまだたのしみも半ばならざる 千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、寝耳に水のおし來るとき、あら／＼しき痘の神に見込れつゝ、今水濃（濃）のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしはれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日経たれば痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ／＼落るやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやして、さん依法師といふを作りて、笹湯浴せる眞似かたして、神は送り出したれど、益／＼よは

りて、きのふよりけふは頼みすくなく、終に六月廿一日の薨の花と共に此世をしほみぬ。母は死貌にすがりて、よ／＼と泣もむべなるかな。この期に及んでは行水のふた／＼び歸らず、散花の梢にもどらぬくひとなどゝあきらめ親しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな也けり。
露の世は露の世ながらさりながら 一茶
去四月十六日、みちのくにまからんと善光寺迄歩みけるを、さはる事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらん逆、道祖神のとどめ給ふならん。

其引

子におくたるところ

似た貌もあらば出て見ん一踊 落梧

母におくれたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮 尙白

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられす 其角

孫娘におくれて、三月三日野外に

遊ぶ

宿を出て離れば桃の花 猿雖



娘身まかりけるに

十六夜や我身にしれと月の欠

杉風

猶子母に放れしころ

柄をなめて母尋るやぬり團扇

來山

愛子をうしなひて

春の夢氣の遠はぬがうらめしい

全

子をうしなひて

蜻蛉釣りけふはどこ迄行た事か

か
千代

やんどなき人／＼の歌も、心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

よみ人しらず

哀也夜半に捨子の泣聲は

母に添寝の夢や見つらん

爲家卿

捨て行く親したふ子の片いさり

世に立かねて音こそなかるれ

兼輔卿

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬる哉

頌日

未^ダ擧^グ歩^フ時^キ先^ニ已^ル到^ル 未^ダ動^ク舌^{ツバ}時^キ先^ニ説^セ了^ル
直^シ饒^ニ著^シ在^ル機^キ先^ニ 更^シ須^ル知^ル有^ル向^カ上^ノ竅^ノ

(頭書)著々ハ基ノ言バ、一手マミと云心也。

貰ふよりはやくうしなふ扇かな

一茶

俄川とんで見せけり鹿の親

大寺や扇でしれし小僧の名

曲者隠れてうかいふ圖

あばれ敷のついと古井に忍びけり

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな

太郎冠者まがひに通る扇かな

紫の里近きあたり、とある門に炭團程なる黒き巢鳥をと

て、籠伏せして有りけるに、其夜親鳥らしく夜すがら其家

の上に鳴ける哀さに、

子を思ふ闇やかはい／＼と

御成り場所に、鳥どもの餌時をしたふ不便さに、

人眠き鶴よどちらに箭があたる

箭の下に母の乳を呑む麗子哉

立志

さすがのさつ男も唇切りしはかゝるおりに
なんありける。

おのれ住る郷はおく信濃、黒姫山のだら／＼下りの小隅なれば、雪は夏きへて霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、万木千草上、國よりうつし植るに、とく／＼く變じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻けり

一茶

鎮西八郎爲朝人磔うつ所に、

時鳥蠅虫めらもよつく聞け

鹿の子や横にくはへし萩の花

老翁岩に腰かけて軸をさづくる圖に、

我汝を待と久しほとゝぎす

幽栖

我家に恰好鳥の鳴にけり

一茶

二三遍人をきよくつて行瑩

飛螢其手はくはぬくはぬとや

成蹊子こそぞ冬つひに不言人と成りしとなん、鶯笠のもとより此ごろ申おこせたりしを。(頭書)史記李廣傳が贊、桃李不言下自成蹊)

つの國の何を申も枯木立

白笠を少さますや木下陰

まかり出たるは此藪の墓にてい

雲を吐く口つきしたり引墓

赤い葉の榮耀にちるや夏木立

稻妻や一切づゝに世が直る

一茶

石川はくはらり稻妻さらり哉

夕霧や馬の覺えし橋の穴

秋風に歩いて逝る螢かな

二番休

乳呑子の風よけに立かゝし哉

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮

七月七日墓詣

一念佛申だけしく芒哉

木啄のやめて聞かよ夕木魚



木つゝきが目利して居る菴哉

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛哉
得手ものゝ片足立や小田の鷹
山寺や椽の上なる鹿の聲
下手笛によつくきけとやしかの聲
茸狩のから手でもどる騒かな

さと女卅五日暮

秋風やむしりたがりし赤い花
さをしかの喰こぼしけり萩の花
我やうにとつさり寝たよ菊の花
のらくらが遊びかげんの夜寒哉
露の玉つまんで見たるわらは哉
立よらば大木の下迎、大家には貧しき者の腰をかゝめて、
おはむきいふもとほりになん。爰の諏方(訪)宮に大きき牛
をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は葉一つもあらず
りけるに、其下をゆきゝする人、日くゝとり得ざるはなかりけり。

十五夜は高井野梨本氏にありて、

古郷の留主居も一人月見哉

月蝕皆既 亥七刻右方ヨリ曉 子六刻甚ク
丑ノ五刻左移

人数は月より先へ缺にけり
人の世は月もなやませ給ひけり
潜(簪)上に月の缺るを目利かな

酒盡てしんの坐につく月見哉

おのが味噌のみそ嗅をしらず

蕎麥國のたんを切つゝ月見哉

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農貌や菊の花
菊園や歩きながらの小盃
杖先で薺解する也きくの花
入道の大鉢巻できくの花
下戸菴が疵也こんな菊の花

さと女笑貌して夢に見えけるま
まを

一茶

お袋がお福手ちぎる指南哉
餅搗が隣へ來たといふ子哉

餅花

かまけるな柳の枝にもちがなる
子のまねを親もする也節きい

東に下らんとして中途迄出たるに

棕鳥と人と呼るゝ寒かな

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋

兩國橋

寒垢離にせなかの龍の披露哉

かも川をわたらじとちかひし人

さへあるに、ひと度籠りし深山

を下りて、しら寒つむりを吹れ

つゝ名利の地に交る。

はづかしやまかり出てとる江戸のとし

其迹は子どもの聲や鬼やらひ

小人閑居、成さ不善

冬籠り悪く物喰を習けり

廿一日節分

一茶

一茶

一聲に此世の鬼は逃るよな
けふからは正月分ぞ麥の色

札納

梅の木や御祓箱を負ながら

廿七日略

坊守り朝とく起て飯を焚ける折から、東隣の國右衛門といふ者の餅搗なれば、例之通り來たるべし。冷てはあしかりなん、ほかゝ湯けぶりの立ち賞瓶せよといふからに、今やゝと待にまちて、飯は氷りのとく冷えて、餅はつひに來ずなりぬ。

我門へ來さうにしたり配餅 一茶

他力信心くゝと、一向に他力にちからを入れて頼み込みい輩は、つひに他力繩に縛れて、自力地獄の炎の中へぼたんとおち入い。其次に、かゝるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂へに、誂ばなしにしておいて、はや五体は佛染み成りたるやうに悪るすましなるも、自力の張本人たるべくい。問ていはく、いか様に心得たらんには御流義に叶ひ侍りなん。答ていはく、

別に小むづかしき子細は不存い。たと自力他力、何のかの
いふ芥もくたをさらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生
の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも
極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくだ
さりませと御頼み申ばかり也。如斯決定しての上には、な
む阿みだ佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長
蜘蛛の行ひして人の目を霞め、世渡る鴈のかりそめにも、我
田へ水を引く盗み心をゆめ／＼持べからず。しかる時はあ
ながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り給
ふべし。是則當流の安心とは申也。穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしの暮 五十七節 一茶

(頭書)親聲上人 隔タル地獄極樂ヨクキケバ
只一念ノシハザ也ケリ

文政二年十二月二十九日

ひ、さる法
師がつれづ
れもあやか
らず。一休
白隠は猶し
かなり。手
ぶりはおの
れが手ぶり
にして、あ
が翁の細み
をたどり、
敢て世塵を

ううしゝゝほめは
らたふは一休白隠を
志らる平ふゝおのれ
平何は
ゆるをたてて世塵を

厭ず、人情
またやるか
たなし。惡
我此外に何
をかいはむ。

嘉永四辛
の亥春彼

岸仲日

臨界四

山人し

るす

厭ず、人情
またやるか
たなし。惡
我此外に何
をかいはむ。
嘉永四辛
の亥春彼
岸仲日
臨界四
山人し
るす



かの岸も

さくら咲

日となり

にけり

かの岸も

さくら咲

にけり

惟然坊は元祿の一畸人
 にして、一茶坊は今世
 の一奇人也。そが發句
 のをかしみは人ミの口
 碑に残りて世のかたり
 草になるといへども、
 たゞに俳諧の皮肉にし
 て、此坊が本旨にはあ
 らざるべし。中野のさ
 と一之が家に秘めおけ
 る一卷物や、ざれ言に

惟然坊は元祿の一畸人
 一茶坊は今世の一奇人也
 そが發句のをかしみは人ミの口
 碑に残りて世のかたり草
 になるといへども、たゞに
 俳諧の皮肉にして、此坊
 が本旨にはあらざるべし
 中野のさと一之が家に
 秘めおける一卷物や、ざれ言に

淋しみをふくみ、可笑
 みにあはれを盡して、
 人情世態無常觀想殘す
 處なし。もし百六十年
 のむかしに在て、祖翁
 の過眼を得むには、惟
 然の兄とやのたまはん
 か、弟とや申し玉はむ
 か。

惺庵西馬

十餘年以來、心からうたふ
 ありて、人情世態を
 観るに、無常の理を
 悟るに、祖翁の過眼
 を得て、惟然の兄と
 やのたまはんか、弟
 とや申し玉はむか。

惺庵西馬